

岡本 勇君を偲ぶ

江 坂 輝 彌

私が岡本君を知ったのは私が上海から復員、慶應義塾大学に復学してからのことである。

岡本君は横須賀の高校を卒業、明治大学専門部歴史科（夜間部）に入学されてからのことであるが、それから約半世紀の歳月が流れている。

岡本君は横須賀市若松町平坂貝塚、青森県下北郡東通村野牛、吹切沢遺跡、横須賀市夏島貝塚、横浜市南区六ツ川町大丸遺跡、青森県三沢市野口貝塚など、縄文文化早期の遺跡を多く手がけられ、いつも層位的観察などには細心の注意をはらい、平坂、夏島、大丸遺跡の調査では従来の想定で、稻荷台—拝島—井草の編年が逆で井草が最も古く、ついで夏島（拝島）—稻荷台の順になることを唱破したのであった。

また、早期から前期への推移については、1966年10月刊の『物質文化』8号に「尖底土器の終焉」と題する興味ある論考を発表している。また縄文文化前期以降、弥生、古墳、歴史時代古窯址に至るまでの論考もあり、また立教大学博物館講座で行なった青森、新潟、長野、三重、鳥取県下など調査報告を分担執筆されたものもある。

また立教大学史学会発行の『史苑』27巻3号に発表した「弥生時代石製工具の意義」と題する横浜市磯子区三殿台遺跡発見の弥生時代中期の石器に対する小篇も彼らしい考証を加えた論考である。

岡本君が最も注意をそそぎ50有余年、研鑽を深めたのは旧石器時代終末から縄文文化草創期から早期まで、更新世末から完新世初頭の人類文化の研究であったのではなかろうか。彼が後10年、健康で、研究を継続できたら更に私達を驚愕させるような論考ができたのではなかろうか。

彼を追憶するまま、本文を書き綴った。

岡本君の心からの冥福を祈り擱筆する。